

## 私と図書館

### 「青い机」

梅川 正美



ブリティシュ・ライブラリー(大英図書館)の主たる図書館は、今は、ロンドンのセント・パンクラス駅横のユーストン通にある。超近代的な図書館で約6000万冊を収蔵する。皆さんも入館されればその素晴らしさを発見していただける。しかしここでお話するのは同図書館が1998年に現在のところに移転する前のことである。

ブリティシュ・ライブラリーは18世紀1753年の法律で、ブリティシュ・ミュージアム(大英博物館)に収蔵された手稿や印刷図書のコレクションを「すべての研究熱心で知的探究心をもつ人」all studious and curious persons に無料で閲覧させることが決められたときから、大英博物館の図書部として発足する。

その閲覧室は何度も移転するが、ここで話する閲覧室は、19世紀中葉に大英帝国の建築技術の粋を集めてブルームズベリーにつくられたもので1857年から1997年まで使用されている。パンテオン神殿のような列柱の玄関をもつ大英博物館の中にあつた。

閲覧室の天井は、内側から見上げると青空のようなライト・ブルーのドームである。天頂からは放射状に20本の金色の柱がおりてくる。柱の間の窓からは明るい光がさしこむ。ドームの高さは33メートル。直径は43メートル。セント・ポール寺院のドームよりも大きい。閲覧室は巨大なドームをのせる円筒であり、円周の壁は3万冊を超える参考書籍の書架である。書架は21段。書籍に到達するためには、細い鉄製の階段と工事現場のように狭い足場を歩く。

円形の部屋の中心は参考係の丸テーブルである。その周りに同心円状のカタログ書架がならぶ。カタログは莫大な量のバインダーで構成され各ページには手でタイプした書籍ごとの紙片が張りつけられている。蔵書が増えるたびに張りましされる。タイプライターの印字のズレや濃淡がある。1981年に、ここを初めて利用したときは、その印字の美しさに魅了されたものである。

カタログ書架から円周の壁にむかって机が放射状に並ぶ。机も椅子もすべて青のソフト・レザーでカバーされ、貴重な書籍が痛まないよう工夫されている。机の前には、つい立があるが、これには二つのつまみがついており、これを引くと革張りの書見台となる。机と二つの書見台で計3冊の本を読むことができる。

スタンドの光はやわらかく、古い本を読みふけていると、ときとして他の人がページをめくる音が聞こえる。この青い机で研究した人は、19世紀の首相をつとめたディズレーリーやグラッドストーン、あるいは小説家ディッケンズや劇作家バーナード・ショー、さらにはインド独立の父ガンジーなど限りない。時間も空間も、いずれも超越した世界、すなわち図書館であつた。